

「THE LAB」活用による研究倫理講習の実施体験レポート

—受講者と共に考える「あなたはどのようなですか？」—

研究倫理の教育のために米国で開発された学習教材の「THE LAB」。大学を舞台にした架空の研究不正事件をバーチャルで体験でき、自分がもしその立場だったらどう行動するか、それぞれの場面で意思決定をすることができます。その選択によって、その後のストーリー展開と結末が変わります。科学技術振興機構（JST）では、このリアルなドラマ仕立ての教材を、機関内で研究倫理教育を実施する際のツールとして活用してもらうため、日本語版を HP 上で公開しています（<http://lab.jst.go.jp/index.html>）。今回、より多くの皆様にご活用いただくため、内容の紹介を含め模擬講習の進め方の一例を紹介いたします。

<「THE LAB」とは>

「THE LAB」は、米国保健福祉省 研究公正局（ORI）作成の映像教材です。大学の研究室で行われた研究不正に関してさまざまな苦悩に直面する 4 人（大学の研究公正責任者、研究主宰者、ポスドク、大学院生）のキャラクターを体験することができるバーチャル体験型の学習シミュレーションです。視聴者がさまざまな場面で「責任ある研究活動（RCR）」に関する判断を行い、その後の経過を何度でも疑似体験でき、倫理的な判断能力や問題解決能力を身につけることができます。

<模擬講習により実施時のポイントを整理>

機関内の研究倫理講習に「THE LAB」を活用する場合、異なる登場人物で立場を変え、複数回実施することが効果的です。今回の体験レポートは、初回に行う講習を想定して、JST 内で行われた模擬講習を基に報告しています。実施後に受講者から得られたさまざまな意見から講習のポイントなどについても整理しています。なお、講師役の JST 担当者は「THE LAB」を活用した講習を初めて行いましたので、各機関の皆様方が初めて講習を実施の際のご参考にしていただけるのではないかと思います。

<模擬講習の実施内容>

主人公とした人物：大学院生キム・パーク

※他に 3 人（大学の研究公正責任者、研究主宰者、ポスドク）が選択可能です。

この教材でキムは研究不正の告発者です。告発に至るまでには、難しい意思決定を行わなくてはなりません。初回の講習では、告発者の立場で考え、研究不正について臨場感の

ある疑似体験をしていただくため、キム・パークを選んでいきます。

受講者は、ドラマの中で「あなたは、どうしますか？」と繰り返し選択を迫られます。選択次第で次の展開が変わる仕組みとなっており、結末も異なってきます。そのため、選択肢からどれを選ぶかを考える場面では、受講者に問いかけるなど、受講者が参加できることを意識しました。

主人公の大学院生は、共著となった論文の実験データが改ざんされているのでは？という疑念を持ちます。そして、自分がどうすべきか周囲に助言を求めようと行動を始めるところから事態が動き始めます。誰に相談するかはドラマの展開で非常に重要です。今回は最終的に、大学の研究公正責任者に会い、告発に至るまでの選択肢を選び講習を進めました。

当初は 35 分の実施時間を見込んでいましたが、結果は 40 分となり予定の時間を超えました。手際よく講習を進めないと、思いのほか時間がかかります。

以下に、実施後に受講者から得られた意見などを基に、講習を実施する際のポイントについてまとめました。

<講習準備>

- ・ DVD またはインターネットとコンピュータ機器をテストし、プログラムが起動することを確認します。
- ・ 会場で音声十分に聞き取れるかなども確認しておきます。
- ・ 投影画面の大きさなどプロジェクターによって見え方が異なる場合があるので確認をしておきます。
- ・ 何度も「THE LAB」のシミュレーションを行い、さまざまな選択肢と選択した結果を体験しておきます

<ポイント1ー講習前ー>

① 受講者に対して「THE LAB」の教材としての次の特色について説明します。

- ・ 研究者として持つべき価値観や倫理的意思決定の手法などを学ぶことができます。
- ・ 自分がその場におかれたら、どのような意思決定を行うことになるか、能動的学習・疑似体験が可能です（インターアクティブ）。

- ・選択した意思決定と行動によって、異なった顛末となり、失敗した結果も、優れた意思決定がもたらした結果も体験できます。
- ・様々な立場（研究公正責任者、研究代表者、ポスドク、大学院生）になって、多角的に問題を検討できます
- ・米国で作成された教材のため日本の制度等とは異なるところもあります。

⇒教材の仕組みを前もって説明しておくことで、進行の途中での説明が簡略化できます。

②講習の主人公を選んだ理由と人物設定について説明します。

- ・初めて視聴する受講者が、選択肢を考える際の判断材料となります。
- ・登場人物についての情報があると話の展開についての理解がスムーズになります。
- ・主人公の立場をより理解して、講習への参加意識を醸成することで、より能動的に取り組める環境を作ります。
- ・進行の途中での登場人物や選択肢の説明が簡略化できます。

＜ポイント２－講習中－＞

③選択肢は受講者と共に考えます。

- ・受講者に挙手を求めるなどして皆で選択肢を検討します。
- ・受講者自身に主人公が置かれた立場に立つことを意識してもらいます。
- ・受講者同士で小グループを作り、ディスカッションを行います。
- ・ディスカッションを行う時間が取れない場合は、受講者が考える時間を取ります。

⇒挙手やディスカッションをすることで、参加意識が高まり、受講者が客観的ではなく自分事として意識するようにします。

⇒時間に限りがあり、講師が選択肢を選んで進める場合には、選択肢の全文を読み上げることで、その間に受講者に対して選択肢を検討し決定する時間を提供する方法もあります。

④ご自身の機関の規程、手続きなどについて簡潔に解説し、受講者の理解を深めます。

- ・選択肢を検討する画面などで、ご自身の機関の規程や手続きについて簡潔に解説します。
- ・あらかじめご自身の機関の規程や手続きを解説する内容と場面を決めておきます。

⇒今回の模擬講習では以下について説明しました。なお、実際の講習時には、詳しい解説の時間は限られるため、該当する資料が掲載されている URL 一覧などを配付する方法もあります。

- ・キムが、改ざんが疑われるデータのオリジナルフィルムかバックアップデータの有無について問われた場面
→ご自身の機関の実験データ等の保存期間、規程等について簡潔に解説します。
- ・キムが「大学の研究公正責任者」に連絡を取る場面
→ご自身の機関における告発の受付窓口、連絡先、手続き等を説明します。
- ・キムが匿名による告発について説明される場面
→ご自身の機関の規程を簡潔に解説します（原則として顕名であること等）。

＜ポイント3－講習後－＞

⑤結末の内容にかかわらず、全ての正解をこの教材の中に求めるのではなく、研究分野や研究現場、国情の違いなどを考え、実際にご自身の立場や研究室などでは、どうすれば良いかを考えることの必要性を説明します。

⇒現実には、ご自身の機関の規程や手続きに従うことになりますので、受講者が自分の状況に当てはめて、選択肢を考えることが大切です。「THE LAB」の中で意思決定に成功した場合を丸覚えしてもあまり意味はありません。

講習では時間に限りがあるため、受講者は十分に考える時間もないまま、意思決定をせざるを得ない場面もあると思われます。また、「THE LAB」は、主人公と選択肢の選び方により、数多くのストーリー展開がありますが、1回の講習ではごく一部のケースしか疑似体験ができません（全パターンを行うと6時間以上かかります）。そのため、講習は1回だけではなく、異なる登場人物で立場を変え、複数回実施することが必要です。

ぜひ「THE LAB」をご活用いただき、公正な研究活動に向けての意識を機関内で高めることにお役立てください。

